風雲の志

幕末小説集

時代小説ベスト・セレクション

風雲の志

時代小説ベスト・セレクション　第一〇巻
風雲の志　幕末小説集
一九九四年一二月一二日　第一刷発行

著　者　森村誠一　他
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
郵便番号　一一二―〇一
東京都文京区音羽二―一二―二一
電話　編集部（〇三）五三九五―三五〇五
販売部（〇三）五三九五―三六二二
製作部（〇三）五三九五―三六一五

印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
©Seichi Morimura and others 1994,
Printed in Japan

ISBN 4-06-254910-7（文２）

風雲の志 ◆ 目次

飯怨　森村誠一　8
寺田屋兇変　柴田錬三郎　28
異説　猿ケ辻の変　隆慶一郎　46
虎徹　司馬遼太郎　72
栄光は遠きにあり　古川薫　102
刺客の娘　船山馨　124

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

逃げる旗本　子母澤寛　146
生命の灯　山手樹一郎　166
勝海舟と榎本武揚　綱淵謙錠　200
編者解説　縄田一男　222

装画　村上　豊
装丁　熊谷博人

風雲の志

〔幕末小説集〕

森村誠一

飯怨（はんえん）

一

徳川第十三代将軍家定は病弱であった。父の十二代将軍家慶の後継者とされながらも、父はむしろ英邁の聞え高い一橋慶喜に将軍職を譲りたがっている気配を見せていた。

父からも見放されていた家定に期待する幕臣は一人もいない。嘉永六年（一八五三）十一月二十三日家定が将軍宣下してから安政五年（一八五八）八月八日（七月六日に死んだが喪を秘した）没するまで、徳川歴代将軍中、最も「寂しい将軍」として四年九か月の短い治世を終った。

時折しもペリーの黒船来航に始まり、欧州列強が相次いで訪れ、二百五十年の鎖国の扉を激しく揺さぶっている多難な時期であった。

家定在世中から一橋慶喜を支持する越前藩主松平慶永は、島津斉彬や水戸斉昭（慶喜の実父）と共に慶喜を子供のない家定の養嗣子として擁立する運動を露骨に展開していた。

家定にしてみれば、後がつかえているから早く出て行けがしに見える。事実、一橋派は暗愚な家定を廃して慶喜を将軍に押し立てたいのである。家定の心中面白かろうはずがない。このころすでに安政の大獄の種子が蒔かれていたのである。

この時期家定を支えるべき老中も政治向きのことは一切家定に相談しない。うつうつとして家定はますます自分の中に閉じ籠もる。端正なマスクの男前の慶喜に比べて家定は天然痘を患い、醜い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

あばた面である。「美女三千」と称せられる大奥にあっても最ももてない男であった。二人の妻には早逝され、安政三年迎えた三人目の妻は、島津斉彬の養女で、家定にしてみれば一橋派がつけた監視役のような気がした。

公私共に疎外された寂しさを、家定は自ら台所に立って料理をつくることでまぎらした。将軍職にある身が野菜の煮しめや芋の煮ころがしをつくって喜んでいたのだから馬鹿にされても仕方がない。

松平慶永などは「イモ公方」と公言したほどである。だが家定にしてみればイモにしたのはだれかという肚がある。

慶永の罵言が耳に入ったのは、家定がポルトガル伝来のカステラ造りに成功したときである。

砂糖、卵、小麦粉、水あめ、蜂蜜、みりんを混ぜ合わせ釜に入れて焼き上げる。この調合と加熱の具合が難しく、何度やってもポルトガル伝来のようにはふっくらと焼き上がらない。

この日成分の調合を少し変えて熱度をわずかに高めてみた。その結果、ポルトガル製に勝るとも劣らぬ仕上がりになった。

試食してみると、香ばしいかおりとしっとりした舌ざわりが絶妙で我ながら〝会心作〟であった。

側近の者に配ると、

「上様、これをお手ずからお造り遊ばしましたか」

「このような美味な菓子はいまだ味わったことがございませぬ」

まんざら世辞でもないように素直な驚嘆の色を見せた。家定はいい気分になっていた。

「イモ公方も、イモだけではなかったとみゆる」

家定がつくったカステラの評判を聞いた慶永が冷笑した。それが家定の耳に入ったものだから、たまらない。

「おのれ慶永め。人を愚弄しおって」

家定は激怒してせっかく造り上げたカステラを床に叩きつけ、足で踏みにじった。だがカステラ造りをからかわれたからといって徳川家に隠然たる勢力を有する慶永を処罰するわけにはいかない。

「いまにみておれ」

家定は深く含んだ。

二

安政四年（一八五七）アメリカ総領事ハリスが条約締結交渉のために来日し、十二月江戸入りをして家定と会見した。

アメリカからの開国を迫られて窮した幕閣は雄藩大名の意見を諮った。これは幕権が確固として揺るぎない時期であれば考えられないことである。ペリー来航時国書受理について諸大名、旗本に諮問したのが前例となり、国政に関して諸藩連合して意見を提出するようになった。

議論は沸騰し、幕府は外様大名からその弱体を見抜かれてしまった。

ハリスの来日時期と併行して将軍後継問題が再燃してきた。政局が内外に多難なる時期に子なし病弱将軍が諸大名に不安をあたえたのである。

慶喜を推す松平慶永、島津斉彬、山内豊信、伊達宗城、徳川慶恕などは、米国との通商条約調印に反対した。これに対して溜間詰めの譜代大名は調印止むなしという態度を示した。

幕府が諸大名に外国との通商条約締結に際して

意見を諮問したことは、必然的に諸大名間に横の連絡を生じさせ、賛否をめぐって二大勢力の対立を打ち出してきた。

この対立がそのまま将軍継嗣問題をめぐる対立となった。

すなわち一橋派に対抗して溜間詰めの中核大名彦根藩主井伊直弼や将軍側近の幕臣や大奥の勢力である。彼らは現将軍に最も近い紀州藩主徳川慶福を擁して一橋派の前に立ち塞がった。

だが慶福は安政四年十二歳の少年である。これに対して慶喜は二十一歳である。幼いころから英明の聞え高く、激動の時代を担う名君として雄藩大名の期待を集めていた。

これに対し井伊直弼は、

「天下の治平は大将軍家の御威徳にこれある事にて、賢愚にのみこれある儀にてはござなく、これ実に皇国の風儀にして外国と異なるところに候。しかるにいま御血脈近き御方おきて、発明の方にと申し候わば、外国流にして正統を尊信すべき皇国の風儀にはこれなき」

と主張し、一橋派の「慶福幼少にして将軍の役に立ち申さず」論を断乎として斥けた。

一橋派の狙いは、慶喜を将軍に押し立て徳川の家門および雄藩連合による合議政治の実現である。幕府の独裁制堅持に固執する紀州派のとうてい容認できないところであった。

この両派にとって条約調印をめぐっての賛否は、正直なところどうでもよかった。紀州派が調印賛成の立場をとったので、反対した形である。反対することによって一橋派の連帯と足場を踏み固めようとする魂胆である。

この時期に隣りの清国でアロー戦争が勃発し、

英仏が清国と交戦して後者が敗れ、天津条約が締結される。英仏が戦勝の余勢を駆って日本に条約締結を迫れば、日本に対して先陣を切っている米国の立場が脅かされる。

ハリスは強硬に条約調印を迫ってきた。

諸大名の意見の統合を得られなかった幕府は、朝廷の権威を借りることをおもいついた。日本を武力統一し、朝廷の上に立っていた幕府は、条約調印に本来勅許など必要としないはずであった。それを敢えて朝威を借りて大名の意見を統一しようと図った幕府は、自ら威勢の衰微を露呈したようなものである。

幕府は勅許は簡単に得られると考えていた。老中堀田正睦が上洛して条約勅許を奏請した。ところが朝廷は攘夷派のメッカであり、時の孝明帝は外国人を「禽獣に類するやから」と忌み嫌うほどの外国人嫌いである。

安政四年六月十七日幕府と雄藩大名の間に立って柔軟な協調政策をとってきた老中阿部正弘が病没して、井伊直弼が政治舞台の中央に登場し安政五年四月二十三日大老に就任すると、紀州派と一橋派の対立は決定的になった。

家定は、将軍独裁制を打破し、事々に自分と比べられる慶喜を擁立する一橋派より、後嗣子は将軍に最も近い血筋から選ぶべきであると主張し幕府の独裁制維持を堅守する紀州派に好感をもち、両者は密接に結びついていく。

のらりくらりとしてとらえどころのなかった阿部正弘より、諸事明快で旗幟鮮明な井伊のほうが、はっきりと味方であることがわかる。井伊にしてみれば自分の勢力を不動のものにするために家定を利用したにすぎなかったのであるが、阿部

は、家定を完全なつんぼ桟敷にまつり上げて利用すらしなかった。

ハリスからは迫られ、勅許は得られず、井伊直弼は重大な判断を迫られた。ハリスは、

「もし幕府に条約締結の権限がないのであれば、京都に赴いて朝廷に直接調印を求めるがよいか」

と開き直った。そんなことをされたら、幕府の権威は地に墜ちる。日本に条約締結を求めている各国がそれに倣うことは目に見えている。外交が幕府をとび越えて朝廷と諸外国との間で行なわれるようになったら、幕府は有名無実の存在に成り下がる。それはどんなことをしても阻止しなければならなかった。

井伊直弼はここに安政五年六月十九日勅許のないまま独断で日米通商条約に調印した。

「日本の国政を任せられている以上、条約調印に一々勅許など必要ない」

と直弼は主張したが、それを言うならそもそも朝廷に対して勅許の奏請などすべきではなかった。

案の定、無断調印は反対派をいきり立たせた。特に一橋派にとって井伊を中核とする紀州派に対する絶好の攻め口となった。

一橋派は井伊の大老就任以後著しい頽勢をこの機に一挙に挽回しようとして反発してきた。

まず六月二十三日一橋慶喜が登城して、井伊大老と面談した。

「先だっては大老職を蒙られ、容易ならざる時節柄、大儀に存ずる。御身はご先祖以来槍一筋のお家柄にて相変らずの忠勤に励まれ、我らも頼もしく存ずる次第にござる」

と皮肉たっぷりに慶喜は切り出した。両人はこ

のとき初対面だったのである。
「不肖拙者はからずも大任を仰せつけられ恐れ入り候えども粉骨砕身仕るべく心得てござります」
と井伊も余裕たっぷりに受けた。
「さてこの度の仮条約に調印の事、そこもとご承知の上のことでござるか」
と鋭い口調で問うた。彼の意識では勅許のない条約はあくまでも「仮」である。
「恐れ入り奉ります」
直弼は平身低頭して答えた。
「調印に際しての叡慮はいかに候や。主上に伺いの上にてのことでござろうな」
慶喜は追及した。
「恐れ入り奉ります」
直弼はただ平伏するばかりである。慶喜は苛ら立ってきた。まるで豆腐に釘を打つように手応えがない。
「おそらくそこもとにも不承知のことを備中(堀田正睦)らが勝手に取り計らいたることでござろうな」
「いや拙者も同意仕り候こと故、恐れ入り奉ります」
直弼はしゃらっとした表情で答えた。
「なんと。そこもとも同意とな。これはもってのほかのこと。備中上洛お伺いの節勅答の次第もあるに、この様なる仕儀にては将軍のご違勅となるであろう。この儀いかに心得るか」
と詰め寄った。直弼は少しも表情を動かさず、
「拙者もさように存じ奉り、初めは拒みましたなれど多勢に無勢、拒み通せず、遂に同心仕ってございます」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor